「会員短信 13」

「俳句と母と私」　井野ひろみ

私が最初に俳句に触れたのは、小学校の低学年の頃です。歳時記や俳誌を読んでいた母が、「目借時」「風花」「山笑ふ」などの季語のことを話してくれた時でした。

私は俳句に興味が無かったのですが、母は一人で俳句を楽しんでいるうちに、いつしか公民館で俳句教室を開き、句の添削をするようになっていました。俳句教室では、一人五句ずつ出して句集を創刊する程、盛況の時もあったようです。

母の言葉で印象に残っているのは、祖父の介護をしている時に「俳句をしていて良かった」「俳句は紙と鉛筆があればできる」と言っていた事です。俳句が介護の負担を解放し、心の拠り所になっていたのでしょう。晩年、母は入院をしても紙と鉛筆を枕元に置いていました。母にとって俳句は身体の一部になっていたようです。

私が俳句を始めたのは、母の遺品の中に古い歳時記を見つけ、その歳時記を持って地域の俳句教室に参加した時です。初めは難しくてお手上げでしたが、先生の添削で良い句になるのが嬉しくて続けてこられました。今、俳句を始めて十二年です。ようやく色んなことが判り始めました。これからも俳句を拠り所として歩んでいきたいと思っています。

暑いねとペットボトルに独り言
今日の月スマホ見る人見下ろして
秋晴や婆のプライド杖畳む

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。